

ニューセラミックスレターのあり方

辰巳砂 昌弘

大阪府立大学大学院工学研究科
連絡先 tatsu@chem.osakafu-u.ac.jp



本学会誌の編集を担当しております副会長の辰巳砂です。以前、このニューセラミックスレターに関する巻頭言を 39 号に書かせて頂いてから、早 5 年が経過しようとしています。本学会誌は、2008 年の和田会長の就任時に、紙面を B5 版から現在の A4 版に一新し、その後、以前の「ニュースレター」から現在の「ニューセラミックスレター」に名称変更いたしました。「会員にとってより役立つ会誌を目指す」という方針のもと、研究会報告、総会資料、事業報告はもとより、全研究会資料を掲載し、本会のすべてのアクティビティーは会誌を残して頂きさえすれば、いつでも取り出せるようになりました。執筆者の献身的なご協力により「フォーラム」や「連載企画」の読み物も充実し、まさに「読んで役立つ」「残して価値ある」とキャッチフレーズ通りの会誌となったと自負しております。

一方昨今、多くの学会や研究会における会誌の電子化の動きが加速し、またペーパーレス化は職場における業務効率化の代名詞とさえなりつつあります。実際私の職場では、この 4 月から全学会議で i-Pad が全員に配られるようになり、紙の資料は完全に姿を消しました。本会のニューセラミックスレターにつきましても、本年 4 月の役員会において、電子化の方向性が打ち出されました。方向が定まったとはいえ、具体的にどのように電子化していくかにつきましては、まだ多くの課題を抱えている状況です。

ところで、私の大学の工学部卒業生の中で最も世間に名前の売れている人物の一人に、作家の東野圭吾さんがいます。私は文庫本でほぼ全作品を愛読しているのですが、彼は書籍の電子化には否定的で、殆ど電子版は出ていません。いわゆる自炊業者などと呼ばれるスキャン代行業者を提訴したりもしています。自炊から電子書籍を勝手に売りさばくような（外国の）業者が現れたことが一つの理由です。音楽も動画も書籍も、そして科学技術情報も、電子化された時点で無限に増殖できるので、その取り扱いについては細心の注意を払う必要があります。特に新技術に関する情報のオープン・クローズは、国益にも影響を及ぼしかねない重要性を秘めています。

本学会誌は、電子化の流れの中にあっても「会員にとってより役立つ会誌を目指す」という方針に勿論変わりはありません。有用な情報提供のための電子データの取り扱いについては、現在会誌企画委員会で議論しています。研究会資料をどのような形で提供するのか、読み物と資料を分けるのか、紙媒体を完全になくすのか等々、会員の皆様の忌憚ないご意見をお寄せ頂ければ幸いです。

今後もニューセラミックスレターを宜しくお願いいたします。